

草津

時間湯のラッパが午前六時を吹くよ。

朝霧ははれても湯けむりははれない。

湯ばたけの硫気がさっとなびけば、

草津の町はただ一心に脱衣する。

高村光太郎

戦国時代には、武将たちが湯を癒しに
泰平の世には、湯治、物見遊山にと、
千数百年の昔から、多くの人々に愛され
にぎわい続けた温泉郷、草津。
『草津に歩みし百人』では、その中でも、
歴史に名を残す、百人をピックアップ。
偉人たちがこの地でつむいだ思い出にふれ、
時計の針をゆっくり戻しながら、
歴史ゆたかな草津物語にふれてください。

古代・戦国・江戸時代
(湯畑 Aブロック)

- ① 日本武尊 — 2p
- ② 源 頼朝 — 2p
- ③ 木曾義仲 — 3p
- ④ 長尾為景 — 3p
- ⑤ 巴御前 — 4p
- ⑥ 丹羽長秀 — 4p
- ⑦ 堀 秀政 — 5p
- ⑧ 朝日姫 — 5p
- ⑨ 近衛龍山 — 6p
- ⑩ 豊臣秀次 — 6p
- ⑪ 大谷吉継 — 7p
- ⑫ 前田利家 — 7p
- ⑬ 清河八郎 — 8p
- ⑭ 行基菩薩 — 8p
- ⑮ 蓮如上人 — 9p
- ⑯ 飯尾宗祇 — 9p
- ⑰ 小林一茶 — 10p
- ⑱ 十返舎一九 — 10p
- ⑲ 清水浜臣 — 11p
- ⑳ 良寛和尚 — 11p
- ㉑ 高野長英 — 12p
- ㉒ 安積良斎 — 12p
- ㉓ 田川鳳朗 — 13p
- ㉔ 佐久間象山 — 13p
- ㉕ 藤田東湖 — 14p
- ㉖ 堀 秀成 — 14p

明治・大正時代
(湯畑 Bブロック)

- ㉗ E.V.ベルツ — 15p
- ㉘ ベルツ 花 — 15p
- ㉙ J.スクリバ — 16p
- ㉚ E.ナウマン — 16p
- ㉛ A.E.ノルデンショルド — 17p

- ㉜ 松浦武四郎 — 17p
- ㉝ C.リー — 18p
- ㉞ 大槻文彦 — 18p
- ㉟ 徳富蘇峰 — 19p
- ㊱ 田山花袋 — 19p
- ㊲ 志賀直哉 — 20p
- ㊳ 宮田常雄 — 20p
- ㊴ 平井晩村 — 21p
- ㊵ 水野仙子 — 21p
- ㊶ 大町桂月 — 22p
- ㊷ 河東碧梧桐 — 22p
- ㊸ 長塚 節 — 23p
- ㊹ 若山牧水 — 23p
- ㊺ 小野湖山 — 24p
- ㊻ 横山大観 — 24p
- ㊼ 川端龍子 — 25p
- ㊽ 犬養木堂 — 25p
- ㊾ E.サトウ — 26p
- ㊿ 尾崎雪堂 — 26p
- ㊽ 嘉納治五郎 — 27p

昭和以降・近代
(湯畑 Cブロック)

- ㊿ 近衛文磨 — 27p
- ㊽ 田中角栄 — 28p
- ㊾ 佐藤栄作 — 28p
- ㊿ 福田赳夫 — 29p
- ㊽ 入沢達吉 — 29p
- ㊾ 石橋長英 — 30p
- ㊿ 阿部真之助 — 30p
- ㊽ 小林秀雄 — 31p
- ㊾ 賀川豊彦 — 31p
- ㊿ B.タウト — 32p
- ㊽ 岸田国土 — 32p
- ㊾ 斎藤茂吉 — 33p
- ㊿ 与謝野鉄幹 — 33p

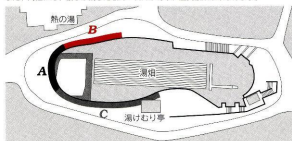
- ㊿ 与謝野晶子 — 34p
- ㊽ 土屋文明 — 34p
- ㊾ 吉野秀雄 — 35p
- ㊿ 鹿兒島寿蔵 — 35p
- ㊽ 村松梢風 — 36p
- ㊾ 菊池 寛 — 36p
- ㊿ 石川達三 — 37p
- ㊽ 林美美子 — 37p
- ㊾ 井上 靖 — 38p
- ㊿ 深田久弥 — 38p
- ㊽ 高村光太郎 — 39p
- ㊾ 相馬御風 — 39p
- ㊿ 西条八十 — 40p
- ㊽ 吉田 一穂 — 40p
- ㊾ 野口雨情 — 41p
- ㊿ 種田山頭火 — 41p
- ㊽ 前田香羅 — 42p
- ㊾ 大野林火 — 42p
- ㊿ 水原秋櫻子 — 43p
- ㊽ 竹久夢二 — 43p
- ㊾ 山下 清 — 44p
- ㊿ 谷内六郎 — 44p
- ㊽ 前田香那 — 45p
- ㊾ 岡本太郎 — 45p
- ㊿ 中山晋平 — 46p
- ㊽ 服部良一 — 46p
- ㊾ 力道山 — 47p
- ㊿ 新緑清隆 — 47p
- ㊽ M.ジャンドラ — 48p
- ㊾ 木下忠介 — 48p
- ㊿ 今井 正 — 49p
- ㊽ 田中絹代 — 49p
- ㊾ 高峰三枝子 — 50p
- ㊿ 上原 謙 — 50p
- ㊽ 石原裕次郎 — 51p
- ㊾ 舘美 清 — 51p

Monument

「草津に歩みし百人」の碑

草津を訪れた偉人・著名人の碑は、湯畑の石畳に刻名されています。

また、周辺には、彼らが残した墓碑・石碑があり、歴史散策が楽しめます。



A 古代・戦国・江戸時代

B 明治・大正時代

C 昭和以降・近代

日本武尊

伝説上の英雄・やまとたけるのみこと Yamato Takeru no Mikoto

[生没年不詳]

生没年不詳

来草年

伝・大和時代東征の折 武勇で名を馳せた、古代伝説・最大の英雄。



『古事記』『日本書紀』で活躍する伝説の英雄。『古事記』では倭 建 命と表記される。モデルになったのは一人ではなく、複数の人物だったという説もあるが、いずれにしろ東国にはゆかりの伝説が多い。景行天皇の皇子で、食事に出てこなくなった双子の兄を諭すように言われたが、殺してしまう。乱暴を恐れた天皇に、九州に熊曾建兄弟の討伐を命じられ、その地で日本武尊の名を得た。九州から帰ると東国の征伐に出かけ、帰途には足柄の坂で、「吾嬬者耶」と言って亡き妻を偲んだ。それが東国を「吾妻」と呼ぶ起源になった。最後は伊吹山の神の毒氣にあたり、三重の能登野で息絶えた。

日本武尊が草津を訪れたのは、東国征伐の帰途だと伝えられています。草津周辺の山々や里を歩くうちに、谷間にもうもうと立ちのぼる湯煙を見つけました。日本武尊は湯氣の上がる傍の石に腰を下ろし、湯につかっただけと言われ、この逸話が日本武尊の草津開湯伝説になっています。座った石は後に御座石と名づけられました。

源 頼朝

征夷大将軍(鎌倉幕府創立者)・みなもとの よりとも Yoritomo Minamoto-no

[久安3年～正治元年]

[1147～1199]

来草年

建久4年/1193

武家社会の扉を開いた、鎌倉幕府の創立者。



日本の歴史上初めて幕府を開いた武将。平治元(1159)年、13歳で平治の乱に参加、武勲をたて官位を得たが、後に敗れて捕らえられ、伊豆に流された。その後20年間は伊豆で流人として過ごしたが、治承4(1180)年5月の以仁王事件の際、身の危険を感じ機先を制して平家に対し挙兵した。石橋山の戦いに敗れ安房国に逃亡したが、後に戦況が好転し武士を統率、9月には鎌倉に入り、10月富士川の戦いで平家を破った。以後、東国に一大勢力を築き、文治元(1185)年に壇の浦で平家を滅亡させ、同5(1189)年には奥州藤原氏を征服して、全国統一を果たした。鎌倉幕府の運営にあたっては、朝廷との微妙な力関係に才覚を示した。

草津の開湯伝説の一つに、源頼朝に関するものがあります。建久4(1193)年に浅間山の麓で、四方を取り囲んで獲物を追い込む巻狩りを行ったとき、草津にも足をのぼし、湯を発見したと伝えられています。この話は、すでに江戸時代の三原野村閑庵の記事に記載されています。

木曾 義仲

武将・きそ よしなか Yoshinaka Kiso
1154～1184

【久寿元年～元暦元年】

来草年
久寿2年/1155

平家を連破。
破竹の勢いから「朝日将軍」の異名も。



平安時代末期の武将。源為義の子義賢の次男。久寿2年、上野・北武蔵を治めていた義賢は、源氏一族の内紛から武蔵国大蔵館（埼玉県嵐山町）で討たれたが、義仲は難を逃れ、信濃国木曾で成長した。治承4（1180）年9月、頼朝にわずかに遅れて挙兵し、平家方の小笠原頼直を越後に追い払って信濃を治めた。翌年には横田川原（長野市）で越後の城氏を、越前水津（敦賀市）では平家の追討軍を破って、北陸道をほぼ手中にし、西海の平家、東海の頼朝とともに「天下三分の形勢」と称された。しかし入京すると後白河法皇と対立し、頼朝の命を受けた源義経・範頼軍との決戦に敗れ、逃走の途中、粟津（大津市）で戦死した。

草津近道には木曾義仲にまつわる伝説が二つ残っています。一つは義仲が木曾で育ったのではなく、六合村で成長したというもの。六合には世立という集落がありますが、その名は義仲がここから世に立ったためと言われています。もう一つの伝承は、草津と六合を中心に義仲の残党が移り住んだという落人伝説です。

長尾 為景

大名・ながお ためかげ Tamekage Nagao
生没年不詳

【生没年不詳】

来草年
延徳2年/1490

守護代から国政を手にした、中世越後の雄。



戦国時代の武将で、景虎（上杉謙信）の父。永正3（1506）年に越後の守護代になり、翌年には主君の守護上杉房能を滅ぼしたが、自らは守護には就かず従兄弟の上杉定実を擁立して、実権を握る。同6（1509）年に房能の実兄顕定に攻められて逃亡するが、翌年には再起して顕定を破り、完全に国政を手中にした。その後は室町幕府との親交を固りながらも、定実の守護は席位にせず自らは守護代のまま、事実上の国主として戦国大名への道を進んだ。上条氏や阿賀北の国人、上田長尾氏による何度かの反為景の動きもあったが、辛うじて封じ込めた後、子の晴景に地位を譲って、隠居生活に入った。

越後の戦国大名、長尾為景が草津を訪れたのは、延徳2（1490）年のことです。たまたま洞治にきていた大光宗（龍神師）という高僧に出会い、大いに感化を受けたと言われています。為景に同席した賀輪城主の長野某氏にいたっては、鎌倉山麓に長年寺を開き、神師を開山として招いたほどでした。

巴 御前

女武者(木曾義仲の従者)・ともえ ごぜん Tomoe Gozen

【生没年不詳】

生没年不詳

来草年
元暦元年/1184



義仲軍に巴あり。
戦場で輝いた、源平の世のヒロイン。

武勇優れた平安末期の美女。木曾（源）義仲の乳母の夫で、中原兼遠（木曾の豪族）の娘。義仲の従者で愛妾ともされている。治承4（1180）年に義仲の挙兵に従って、越中国（富山県）礪波山の戦などを経て入京する。元暦元（1184）年1月、近江栗津の戦では敵の首をねじ捨てるという大活躍を遂げたが、死を覚悟した義仲の命令で戦場を離れた。中世前期は武家の女性の地位は高く、巴御前は「大力は女性の血筋で伝えられるという信仰」をもとに造形化された女性。彼女の人生の後半は謎につつまれており、『源平盛衰記』では、巴がのちに和田義盛の妻となり、朝比奈義秀を生み、越中石黒で出家して死んだという伝説を残している。

元暦元（1184）年、義仲は栗津の戦で31歳の生涯を閉じました。巴は義仲軍の残党とともに山奥へ逃れ、白飯山麓にある湯の池のほとりまでたどり着きました。3月半ばを過ぎた白飯の麓。爽やかな高原の風光は、最愛の義仲の死に傷つき、悲しみにくれる巴の心をやさしく包み抱いた、と伝えています。

丹羽 長秀

大名・にわ ながひで Nagahide Niwa

【天文4年～天正13年】

1535—1585

来草年
天正10年/1582

信長の天下統一を支えた、織田家随一の名将。



安土桃山時代の武将。尾張国生まれと伝えられ、父の死後、織田信長に仕え、信長の養女と結婚した。元龜2（1571）年、近江国の佐和山城を落とした功から同城主となり、天正元（1573）年には信長の命により琵琶湖に大型船を造営した。信長が目指した天下統一の戦にはほとんど参加し各地を転々とした。豊臣秀吉らと明智光秀を討った後、清州会議で若狭国他を領することになり、坂本城（大津市）に移って織田家を支えた。賤ヶ岳の戦いでは豊臣方につき、戦功によって越前国と加賀国の半分を与えられたので、北庄（福井市）に移った。その2年後、同地で没した。

本能寺の変が起る数ヵ月前の、天正10（1582）年の3月、長秀は草津を訪れたと言われています。甲州の天目山の戦で武田勝頼を破った後、堀秀政、多賀新左衛門らとともに草津へ向かい、出陣につかて戦の労を癒したとのことです。

堀 秀政

[天文22年～天正18年]

大名・ほり ひでまさ Hidemasa Hori
1553～1590来草年
天正10年/1582織田家中に聞こえた切れ者。
のち、秀吉の知恵袋に。

安土桃山時代の武将。はじめは美濃国の斉藤道三、後に織田信長に仕えた。天正元（1573）年に越前で起きた一向一揆の平定をはじめ数々の戦に参加、朱印状の発給に際しては書状を添えるなど、信長の側近として活躍した。同9（1581）年には近江国の長浜城の城主となり、本能寺の変で信長が自害した後は、豊臣秀吉の先鋒として山崎の戦に参加した。つづいて賤ヶ岳、小牧・長久手などの戦を経て、同13（1585）年には丹羽長秀の後を受けて越前国の北庄に移った。小田原攻めの陣中で病死した。

信長、秀吉と天下人に仕えた秀政が、草津の湯を楽しんだのは天正10（1582）年の3月だと伝えられています。「甲州・天目山の戦の後、織田家に仕えた丹羽長秀、多賀新左衛門らとともに訪れ、しばし休養した」という史実が、『関原家譜』という書物に残されています。

朝日姫

[天文12年～天正18年]

徳川家康正室・あさひひめ Asahi Hime
1543～1590来草年
天正15年/1587

政略結婚の悲劇で語り継がれる、秀吉の妹。

豊臣秀吉の異父妹。朝日方、駿河御前とも呼ばれる。天正12（1584）年、小牧・長久手の戦の後、秀吉は上洛要請に応じない徳川家康に、当時、佐治日向守に嫁いでいた妹、朝日姫を妻として送った。佐治は天下のためと命令に従ったが、代償は受け取らずに自害（あるいは隠居、定かでない）した。朝日姫の後も秀吉は家康に人質を送ったため、ついに家康は上洛。秀吉の臣下となった。朝日姫は政略結婚の犠牲になった人物の代表として、後世に語り継がれている。

豊臣一族でもっとも早く草津を赴いたのは、秀吉の異父妹、朝日姫です。訪問時は、すでに家康の正室となっていました。草津に赴いた3年後の天正18（1590）年には、繁業第で亡くなり、そのことから進山ではなく幽治のために訪れたもの、と推測できます。

近衛 龍山

【天文5年～慶長17年】

公家・このえ りゅうざん Ryuzan Konoe
1536～1612

来草年

天正15年/1587

諸大名に従き、乱世を生き抜いた公家。



天正15（1587）年3月に来草した龍山は、その時の感動を10首の和歌に残しました。それぞれの和歌は、最初の1文字に「龍泉樂師十二神」の名号を据え十首目に「むすふてふこの管かけの出湯こそ むへも若い嘘くすり成けり」と温泉樂師を讃えています。この最後の一首からも、草津温泉が戦国期、不老長寿の湯として広まっていたことがわかります。巻物は、草津山光泉寺に所蔵。

豊臣 秀次

【永禄11年～文禄4年】

大名・とよとみ ひでつぐ Hidetsugu Toyotomi
1568～1595

来草年

天正16年/1588

伯父・秀吉を継いで関白に。
趣味人としても多才。



豊臣秀吉の甥。天正12（1584）年、小牧・長久手の戦では指揮に失敗。味方に多数の死者を出し、秀吉に叱責された。その後、西国や中国の遠征、秀吉とともに出陣した九州征伐では戦功著しく、大納言・豊臣秀長、嫡男の鶴松が没すると、秀吉の養子に。関白職を譲られて豊臣家の相続も約束された。しかし実権は秀吉が握ったままで、文禄2（1593）年、嫡男・秀頼の誕生に、動揺。ついには乱行の果てに謀叛を企てたと噂されて、切腹に追い込まれた。妻子、側室30数人も京都の三条河原で斬られ、悲劇の人生の幕を閉じた。

秀次が草津を訪ねたのは、天正16（1588）年の九州征伐の翌年です。秀次の来草を開きつけた小諸城主の依田康親が、わざわざ小諸から草津に出向き、特設の茶店を設けて秀次を接待しました。この史実は、康親の事蹟を記した「寛政重脩諸家譜」という文書に伝えられています。

大谷 吉継

大名・おおたに よしつぐ Yoshitsugu Otani
1559～1600

【永禄2年～慶長5年】

来草年
文禄3年/1594

石田三成との契り固く、関ヶ原に散った
更僚派の将。



安土桃山時代の武将。その出身は豊後国とも近江国とも言われ定かではない。はじめ豊臣秀吉に小姓として仕え、次第に頭角を現した。天正11（1583）年の賤ヶ岳の戦などで戦功を上げ、越前国敦賀城の5万石の大名になった。その後も小田原攻めと、奥州の平定に活躍し、渡海して明軍との和平交渉にも臨んだ。秀吉の死後は、徳川家康の天下統一に協力する姿勢を示したが、旧友石田三成の「打倒・家康」という固い意志を知り、三成に同調した。敦賀で家康方の前田利長の軍を破ってから関ヶ原に向かい、善戦したが、小早川秀秋の軍に攻められて自害した。

吉継が、草津に訪れたのは、文禄3（1594）年のこと。自身の上杉屋敷の老臣に宛てた書翰で確認できます。一説では、吉継はハンセン病患者であったと伝えられており、訪問の目的は湯治にあったとか。その史実からも、当時から「草津の湯は病に効く」ということが通説となっていたことがわかります。

前田 利家

大名・まえだ としいえ Toshie Maeda
1538～1599

【天文7年～慶長4年】

来草年
慶長3年/1598

五大老の一人。
秀吉とは武家屋敷住まい以来の間柄。



いわゆる「加賀百万石」の礎を築き、金沢繁栄の根となった武将。尾張国に生まれ、14歳で信長の近習、19歳の時、顔に矢が刺さったまま敵を楯で倒したという逸話も。秀吉とは武家屋敷住まいの頃から親交が深く、天正9（1581）年、能登国を拝領し国持大名になった。本能寺の変の後、対立した豊臣秀吉と柴田勝家とは親密だったが、勝家に加勢し参戦した賤ヶ岳の戦では、途中で秀吉に降伏。加賀国や越中国の一部を手中に収めて加賀藩の原形をつくり、三女は秀吉の側室、四女は養女になった。五大老の一人として秀吉政権を支え、秀吉の次男秀頼の守り役にもなったが、秀吉没後の翌年、大阪で亡くなった。

利家が草津で湯治をした事実は、戦前まで歴史の中に埋もれていました。慶長3（1598）年、隠居して身軽になった利家は、健康を回復するために、天下の名湯・草津に向かったのです。その一行には、調教師や薬師もふくまれており、盛大な来草となりました。「加賀百万石」といわれた前田家の経済力を伝えるエピソードです。

清河 八郎

尊王攘夷志士・きよかわ はちろう Hachirou Kiyokawa
1830～1863

来草年
文久元年/1861



文武に秀で、
のちの「新撰組」の基礎を築いた志士。

幕末の尊王攘夷志士。出羽国に生まれ、文筆を好み諸国の名士を数待する家庭に育った。江戸に出て東条一家や安積良斎に師事。さまざまな友人を得、近畿や中国、九州に歴遊した。安政元（1854）年、神田で塾を開き、同志たちと虎尾の会を結成して、尊王攘夷を義策した。万延元（1860）年の殺傷事件で追われる身となり、東北から九州まで逃げ回った。文久2（1862）年、島津久光の上洛を機に挙兵しようとしたが、寺屋の変で失敗。横浜の外国人居留地の焼き討ちを計画し、見廻組の幕吏により斬殺。「新撰組」の基礎をつくった人物としても知られる。

清河八郎は、万延元年の殺傷事件で地下に潜伏し、郷里を脱出。越後から草津に出ました。折しも草津は盆であったため、家々では先祖の供養をし、それを見た八郎は、郷里の肉親を思い、再び先祖の墓は見られないだろうと、胸がらっぱいになったといわれます。その時の故郷を思う心情は、彼の手記「潜中秘略」に綴られています。

行基菩薩

僧侶・ぎょうきぼさつ Gyokui Bosatsu
668～749

【天智7年～天平勝宝元年】

来草年
養老5年/721



全国を行脚し、各地で布教。
初の日本地図作成も。

奈良時代の僧。河内国の生まれで、父母は百済系の帰化人の氏族だった。15歳で出家。^{（説小治政論）}「説小治政論」などの教典を学び、たちまち理解し、秀才の誉れが高かった。山林修行に励み、やがて広く各地で布教活動を行い多くの信者を得た。その説法的な方法から朝廷の糾弾を招いたこともあったが、各地で灌漑事業などを行ううちに朝廷との関係も好転した。天平15（743）年、東大寺の大仏建立のために勧進活動を行い莫大な寄進をしたので、同17（745）年には今まで例のなかった大僧正の位を与えられた。その事跡は『続日本紀』『日本書紀』『行基年譜』などに見られる。

草津の御師堂を守る光泉寺に、「温泉奇功記」という書物があります。その由来記によると、奈良時代の僧、行基が各地で布教活動を行ううちに山深い草津にいたると、ことごとく靈氣にあふれた中でも特に仁恵の氣をふくんでいるところがありました。行基が祈禱すると、そこから温泉が湧き出したということです。

蓮如上人

[応永22年～明應8年]

僧侶・れんによしょうにん Rennyō Syounin
1415～1499

来草年

文明4年/1472



本願寺第8世宗主。浄土真宗中興の祖。

室町時代の浄土真宗（一向宗）の僧。本願寺中興の祖。父は本願寺第7世の存如で、17歳のときに青蓮院で得度。20歳頃から父の伝道活動を助け、存如が死去すると宗主に就任した。真宗の勢力拡大を積極的に進めたため、延暦寺を刺激。大谷本願寺の破却を招いた。文明3（1471）年、越前国古崎（福井県金津町）に赴き、ここを拠点として北陸地方への布教に努めた。本願寺は加賀国の富樫一族との確執から活動の中心を畿内に戻し、京都の山科に本願寺を建立。明応5（1496）年、石山本願寺が完成すると、本山を移した。蓮如の功績は、浄土真宗の開祖・親鸞の説いた他力思想を、民衆にわかりやすく伝え、教えを広めたことによる。

蓮如は、越前国の古崎を拠点に北陸地方に布教活動をしていた時分に、東北や関東地方にも足をのびました。草津に立ち寄ったのは、二度目の単回布教の時。信州の西儀寺の住職、良空に案内され、一月ほど逗留しました。長野県真田町には、草津に向かう途中、蓮如が書いたと伝えられる名号が残されています。

飯尾 宗祇

[応永28年～文亀2年]

連歌師・いのお そうぎ Sougi Inoo
1421～1502

来草年

文亀2年/1502



北野連歌会奉行などで名を上げた、 当代随一の連歌師。

室町時代の連歌師。早くから京都の相国寺で仏道の修行に励んでいたが、30歳前後に仏門を離れ、連歌師を志した。同時に古典、神道、和歌、古今伝授を学び、広く古典学を修めた。京都をはじめ全国各地で、和歌や連歌の会、古典講義を行い、長享2（1488）年には連歌界で最高のもてなしである北野連歌会所奉行に任ぜられた。旅とともに生涯を送り、最後は箱根湯本で没す。伝統的連歌の符号修辭と、風雅の趣をよく学び、古典的風格の連歌を大成。連歌史に大きな足跡を残した。代表的作品は、句集「下草」、連歌論「吾妻問答」、紀行文「白河紀行」など。

宗祇が草津に来たのは、旅に生きた生涯を終える約3カ月前、文亀2（1502）年のことです。足元もおぼつかなくなっていた宗祇は、弟子の宗長に連れられて湯治に訪れました。宗長の手記にはその様子が記されていて、一行は、当時効能ゆたかな温泉として知られていた草津のほか、宗祇の願いで伊香保にも逗留。師の体をおもなばかる弟子の、優しい思いが伝わってきます。

小林 一茶

[宝暦13年～文政10年]

俳人・こばやし いっさ Issa Kobayashi

1763～1827

来草年

文化5年/1808

「一茶風」。旅に生き、独特の俳風を確立。



「雀の子 そこのけそこのけ お馬かとおる」など機知に富んだ表現で知られる江戸後期の俳人。生まれは信濃国柏原村（長野県信濃町）。農家の長男として生まれたが、3歳で生母と死別。祖母には愛されたが、後に迎えた継母に冷遇。15歳の時に江戸に奉公へ。俳諧の葛飾派に入門したのは25歳の頃。わずか3年で、葛飾派の総帥・溝口素丸の書記役に抜擢された。30歳以降は、関西、四国、九州方面を遊歴し、俳諧修行に励んだ。51歳で郷里に帰住。一旦は生活も安定したが、その後は没するまで不幸が続く。生活派として独自の句風を残す。代表作に「おらが春」。

生活派俳人として有名な一茶は、草津の旅を紀行文「草津道の記」に著しています。その中に、「湯けむりに ふすばりもせぬ 月の貌」という草津の情趣を詠んだ句があり、光泉寺・階段下の句碑に刻まれています。一茶は、当時草津で旅館を営み俳人でもあった黒岩鶴白と親交が深く、その縁あってか、何回か来草しています。

十返舎 一九

[明和2年～天保2年]

戯作者・じっぺんしゃ いっく Ikku Jippensya

1765～1831

来草年

文政2年/1819

「弥次北珍道中」でお馴染みの作家。 名コンビは、草津でも膝栗毛。



江戸時代の戯作者。十返舎の号は香道における黄熟香の十返しによる。駿河国生まれで、江戸に出て奉行に仕えたが、大阪に移る主君に同行した。在阪中に辞任して、近松東南の門に入り浄瑠璃作者となった。寛政元（1789）年に上演された「木下藤太郎合戦」に合作者として参加。寛政5（1793）年、江戸に帰り、山東京伝の知遇を得、京伝の黄表紙の挿絵を描いた。しばらくは黄表紙の世界で生計を立てていたが、享和2（1802）年に発表した滑稽本「浮世道中膝栗毛」が爆発的な人気を博した。これが後の「東海道中膝栗毛」の初編となり、一九は「膝栗毛シリーズ」を死ぬまで書きつづけた。

戯作者・一九は、文政年間二度来草。その時の思い出は『上州草津温泉道中・膝栗毛第十編』『方言旅行善光寺草津温泉道中金草鞋』などの作品に、独特の洒落な文章で描かれています。関山公園沿いの石碑には「上州草津温泉道中へ」の一文が刻まれています。また、一九の文章からは、「近世・草津の黄金時代」と形容された江戸後期の賑わいぶりがかえりかえります。